青年期女子の身体可変性への認知と身体満足感との関連

The relationships between cognition of body variability and body esteem in female youth

大村美菜子 *1　小島弥生 *2
Minako OHMURA　Yayoi KOJIMA
中田洋二郎 *3　沢宮容子 *4
Yojiro NAKATA　Yoko SAWAMIYA

問題と目的

青年期の女子には，自分の身体について不満足感を抱く傾向がある。Harter（1998）は，10代の女子が年齢の上昇に伴って身体的外見に対する満足感を低めることを指摘している。また，江田（2006）は女子大学生を対象とした調査を行い，標準体重であるにも関わらず，自分の体型を「太っている」，あるいは「やや太っている」と評価する者が８割以上であることを示しているが，この回答結果も自分の身体への不満足感のあらわれとみることができるだろう。

身体に対する満足感・不満足感には，身体全体に対するもののほかに，身体の個々の部位に対するものもある。石原・大澤（2003）は，青年期女子が不満足感を抱いている身体部位として，「足（が太い）」，「ウエスト（が太い）」，「腕（が太い）」などをあげている。また，金本めぐみ・横沢・金本益男（1999）は，身体の各部位に対する女子大学生の満足感を検討し，女子大学生が「太もも」，「ヒップ」，「脚」など主に下半身に対し不満足感を抱いていると報告している。金本ら（1999）はこの調査結果から，下半身は即時的に変えることが困難な身体部位であることから強い不満足感を抱きやすい可能性を指摘している。下半身以外の身体部位に関する満足感・不満足感については，直接的な検討ではないが，例えば村澤（2000）の顔の美醜観に関するアンケート調査によると，青年期女子では「好きな顔の部分」でも「嫌いな顔の部分」でも鼻，目，口，および肌が上位を占めている。また，女性の醜形恐怖症者が悩みの対象として訴える身体部位として，「肌」が最も多かったことが報告されており（Phillips，Menarda，& Fay，2006），個々の身体部位に対する満足感・不満足感について，身体全体の満足感・不満足感とは別に検討することに意義があると考えられる。

ところで，青年期女子の身体全体に対する満足感・不満足感については，いくつかの心理的特性との関連が明らかにされている。女子大学生の身体満足感と自尊感情との関連を検討した研究では，身体満足感が低い場合に自尊感情も低いことが報告されている（鈴木・伊藤，2001；堀江，2005）。また，柴田（1990）は青年期女子の身体満足感とシャイネス[1)]との関連を検討し，身体満足感の低さが，会話におけるシャイネス（不安感，恥ずかしさ，および発話量の減少）に影響を及ぼすことを示している。これらの先行研究から，身体満足感の低さが自尊感情を低め，対人行動を抑制する可能性が考えられる。

では，個々の身体部位に対する満足感・不満足

*1　大村美菜子　埼玉工業大学人間社会学部非常勤講師
*2　小島　弥生　埼玉学園大学人間学部人間文化学科
*3　中田洋二郎　立正大学心理学部臨床心理学科
*4　沢宮　容子　筑波大学人間系

感と心理的特性との間にはどのような関連があるだろうか。この点について，大村・小島・中田・沢宮（投稿中）は青年期女子の身体満足感を部位ごとに測定し，身体の各部位に対する満足感が自尊感情を媒介してシャイネスにどのような影響を及ぼすかについて検討している。身体の32部位の満足感について因子分析から「シルエット」,「目」,「鼻口」,「肌」,「髪」の５部位に分類し，パス解析に用いた結果,「肌」の満足感のみが自尊感情やシャイネスに影響を及ぼすこと，および，その他の４部位への満足感は自尊感情やシャイネスへの影響は認められないことが明らかとなっている。大村ら（投稿中）は，この結果に関して，肌がその他の身体部位よりも自分らしさと直結する部位であることから示された結果であるためと考察しているが，金本ら（1999）の知見をふまえた他の説明可能性として身体部位の可変性に対する認知が影響していると考えられるのではないか。つまり，シルエットのように可変性が低い（変えにくい）と認知される身体部位については満足感が低くなりやすく，その結果，自尊感情を低めて対人行動を抑制することにつながる一方，可変性が高い（変えやすい）と認知される身体部位では満足感が高くなりやすく，自尊感情や対人行動にもよい影響力を及ぼす可能性があるのではないだろうか。そこで本研究では，これらの考えを検討するため，個々の身体部位の可変性についての青年期女子の認知を確認し，可変性に対する認知と身体満足感との関連を検討する。

身体部位の可変性の認知について，大村・小島・中田・沢宮（印刷中）は，女子大学生を対象に自由記述を求め，身体の６部位（「顔の造り」,「目」,「下半身」,「髪」,「肌」,「上半身」）のそれぞれにどの程度可変性があると感じているかを検討している。自由記述で得られた回答をＫＪ法により分類した結果,「目」や「髪」については“アイメイク”や“ヘアスタイルチェンジ”など，一時的に装いを変えられるものに関する記述が多くみられた。また,「肌」に関しては“スキンケア”や“体の中から改善”など，地道な努力が効力を発揮することで変えられるものに関する記述が多くみられた。一方,「上半身」,「下半身」や「顔の造り」については“整形”や“体型の改善”に関する記述のほか，“容易には変えられない”という記述が多くみられた。これらの結果をまとめると，可変性の高い身体部位は，第一に「目」や「髪」，次いで「肌」であり,「顔の造り」,「上半身」,「下半身」は相対的に可変性が低いと青年期女子は認知している可能性がある。

以上をふまえ，本研究では，個々の身体部位の可変性に対する青年期女子の認知について段階評定を用いて測定し，身体部位間の可変性に対する認知には大村ら（印刷中）の結果から導き出されるような差異が存在するかどうかを確認することを第一の目的とする。次に，個々の身体部位への可変性に対する認知と満足感との間にどのような関連がみられるかを明らかにすることを第二の目的とする。

方　法

１）調査対象者よび調査時期

2013年７月～10月に東京都内にある４年制大学３校および専門学校１校において，女子学生151名（平均年齢19.62歳，*SD*=1.81）を対象に調査を行った。

２）手続き

すべての調査において，講義時間の一部を借りて質問紙を配布し，その場で回答を求め，回答後に一斉回収した。回答時間はいずれも約15分であった。質問紙を回収した後，研究計画書を配布し，調査の目的について簡単に説明した。

３）調査内容

質問紙による調査を実施した。用いた尺度は以

下のとおりである。なお，調査時には他の研究に用いるための尺度も含まれていたが，ここでは本論文に関するもののみを示す。

①身体満足感に関する項目群（32項目）

枡田・牛田・永野（1992）が，自己の身体に対してもつ満足度を測定するために考案した「身体カセクシススケール」の中から26項目を用いた[2)]。ただし，調査対象者が女性であるため，「胸の厚さ」の項目を「胸の大きさ」に変更した。これら26項目に新たに「ヘアスタイル」，「髪の質」，「眉の濃さ」，「顔全体」，「ノーメイク」，「化粧した顔」の計６項目を付け加えた[3)]。これらの計32項目について，“自分の外見にどの程度満足していますか”という教示文を提示し満足の程度を尋ねた。回答は“満足している”から“全く満足していない”までの５段階評定とした。

②身体可変性に関する項目群（32項目）

上記の満足感を尋ねた32項目と同じ項目について，“自分の外見をどの程度変えられると思いますか”という教示文を提示し可変性に対する認知（可変性認知）の程度を尋ねた。回答は“非常に変えやすい”から“非常に変えにくい”までの５段階評定とした。

結　果

１）身体部位ごとの可変性に対する認知

大村ら（投稿中）の因子分析にならい，32項目のうち，９項目（肥満度，ウエストの太さ，プロポーション，腕の太さ，ヒップの形，脚の長さ，脚の形，肩幅，首の太さ）を「シルエット」，３項目（目の大きさ，目の形，まつげの長さ）を「目」，４項目（口の大きさ，唇の厚さ，鼻の形，鼻の高さ）を「鼻口」，５項目（皮膚のきめ，顔の色艶，ノーメイク，顔全体，化粧した顔）を「肌」，３項目（ヘアスタイル，髪の色，髪の質）を「髪」を構成する項目として分類した。これら５つの身体部位について，満足感および可変性認知の評定値を単純集計し，各身体部位を構成する項目数で割った値を，各身体部位の満足感得点ならびに可変性認知得点とした（Table１）。

Table１　満足感得点ならびに可変性認知得点

	満足感		可変性認知	
	M	*SD*	*M*	*SD*
シルエット	2.44	0.80	2.50	0.75
目	3.09	1.19	2.48	1.03
鼻口	2.88	0.90	1.83	0.87
肌	2.71	0.82	2.86	0.93
髪	3.12	1.03	3.20	0.89

可変性認知得点について一要因被験者内分散分析を実施した結果，身体部位間で可変性に対する認知に差があることが示された（$F(4,600)=72.59$, $p<.001$）。多重比較の結果，「髪」がもっとも可変性が高く（3.20）認知され，次いで「肌」の可変性が高く（2.86）認知されていた。「シルエット」（2.50）および「目」（2.48）の可変性認知得点は「髪」や「肌」よりも有意に低く，「鼻口」（1.83）よりは有意に高いという結果であった。

２）各変数間の相関

次に，５つの身体部位の満足感得点と可変性認知得点の相関係数を算出した（Table２）。「髪」に対する満足感と可変性認知との間に$r=.19$（$p<.05$），「肌」に対する満足感と可変性認知との間に$r=.33$（$p<.01$），「鼻口」に対する満足感と可変性認知との間に$r=.19$（$p<.05$）と，それぞれ弱いから中程度の正の相関が認められた。一方で「シルエット」に対する満足感と可変性認知との間（$r=.12$, *ns*），および「目」に対する満足感

Table２　各変数間の相関係数

		可変性認知				
		シルエット	目	鼻口	肌	髪
満足感	シルエット	.122	.072	.083	.149	.171*
	目	.164*	.140	.052	.058	−.047
	鼻口	.167*	.095	.194*	.177*	.138
	肌	.256**	.085	.025	.332**	.121
	髪	.024	.006	−.019	.024	.188*

*：$p<.05$，　**：$p<.01$，

と可変性認知との間(r=.14, ns)には相関は認められなかった。

3）身体満足感を従属変数とした重回帰分析

５つの身体部位に対する満足感と可変性認知との関連をさらに検討するために，ある身体部位の満足感得点を従属変数とし，５つの身体部位の可変性認知得点を独立変数とするステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った（投入基準 : p<.05, 除去基準 : p<.10）（Table３）。

Table３　身体満足感を従属変数とした重回帰分析

従属変数（満足感）	可変性認知 シルエット	目	鼻口	肌	髪	説明率 R^2
シルエット	−	−	−	−	.17*	.03*
目	.16*	−	−	−	−	.03*
鼻口	−	−	.19*	−	−	.04*
肌	−	−	−	.33***	−	.11***
髪	−	−	−	−	.19*	.04*

*: p<.05,　***: p<.001,
−: 分析から除外された変数

５つの重回帰分析の結果,「肌」に対する満足感を従属変数とする重回帰分析の説明率が0.1%水準で有意であった（R^2=.11)。「肌」に対する満足感を説明する有意な可変性認知は「肌」に対する可変性認知（β=.33, p<.001）のみであり，他の４つの身体部位可変性認知の偏回帰係数は有意にはならなかった。「肌」以外の４つの身体部位に対する満足感を従属変数とする重回帰分析については，５%水準で有意であったもののR^2の値が.03～.04と低かった。また，従属変数の身体部位と一致する可変性認知の偏回帰係数が有意となった分析結果（「鼻口」と「髪」）とともに，従属変数の身体部位とは一致しない可変性認知の偏相関係数が有意となった分析結果（「シルエット」と「目」）も得られた。

考　察

本研究の第一の目的は，個々の身体部位の可変性に対する青年期女子の認知について先行研究（大村ら，印刷中）の結果から導き出されるような差異が存在するかどうかを確認することであった。質問紙調査の分析結果から,「髪」がもっとも可変性が高いと認知され，次いで「肌」の可変性が高いと認知されていた。「シルエット」および「目」については,「髪」や「肌」ほど可変性が高いと認知されておらず,「鼻口」よりは可変性が高いと認知されていた。この結果を大村ら（印刷中）と比較すると,「目」以外の４つの身体部位に対する可変性認知については類似する結果となった。「髪」に関しては，本研究の調査対象者によっても“ヘアスタイルチェンジ”などで一時的に装いを変えられる身体部位であることが意識されており，その結果として，可変性が高いと認知されていたと考えられる。同様に「肌」に関しても，本研究の調査対象者が“スキンケア”や“体の中から改善”など努力次第で可変性が高くなると認知していた可能性がある。「肌」の可変性認知の平均値は理論的中点を下回る2.86点であり,「髪」ほどは可変性が高いと認知されてはいなかった。しかし,「シルエット」や「鼻口」のように変えるためのコストの大きさ（例えば, 整形など）も想定されづらく，地道な努力が必要ではあるが比較的可変性が高いと認知されていたと考えられる。唯一, 大村ら（印刷中）と結果が一致しなかった「目」の可変性認知については,“アイメイク”のような一時的な装いでの変えやすさよりも,“整形”のような根本的な変化が想起されたために，可変性が低いと認知されていた可能性が考えられる。

本研究の第二の目的は，個々の身体部位への可変性に対する認知と満足感との間にどのような関連がみられるかを調べることであった。相関分析の結果，同じ身体部位の満足感と可変性に対する認知との間に有意な正の相関関係がみられたのは「肌」,「髪」,「鼻口」の３部位のみであった。特に,「肌」に対する満足感と可変性に対する認知との間に中程度の正の相関関係がみられ，この結

果が重回帰分析の結果にも反映されていた。このことから，肌の状態を変えやすいと感じているほど，肌に対する満足感が高いことが明らかとなった。この結果をふまえると，大村ら（投稿中）で示された「肌」に対する満足感が自尊心の高さや対人行動に結びつく現象については，「肌」が自分らしさと直結する部位であることとともに地道な努力次第で自分の望む状態に変えることができる部位（大村ら，印刷中）であることもその理由として考えられる。

「肌」に対する満足感と可変性に対する認知との関連を比較すると，他の４つの身体部位については満足感と可変性に対する認知との間に強い関連があるとはいいがたい結果となった。この点については今後さらに検討する必要があるが，「シルエット」と「目」の２つの身体部位については満足感と可変性に対する認知の間の相関がなく，重回帰分析においてもその身体部位ではない身体部位に対する可変性に対する認知の偏回帰係数が有意な効果をもつなど，今回の結果からだけでは説明がしにくい結果であった。少なくとも，「シルエット」に対する満足感や「目」に対する満足感は，可変性に対する認知という概念だけでは説明できないといえるだろう。その一方で，「髪」と「鼻口」の２つの身体部位については満足感と可変性に対する認知の間に弱い正の相関がみられ，重回帰分析においても可変性に対する認知の偏回帰係数が有意となっていた。「髪」については一時的に装うことが容易にできる部位（大村ら，印刷中）であるために，「肌」とは異なり，変えられることが満足感につながるほどの重要性をもたない可能性があり，それが偏回帰係数の小ささに反映されたと考えられる。一方，「鼻口」については多くの人にとって変えることにコストがかかり，困難であると認知される部位（大村ら，印刷中）であるため，可変性を認知している比較的少数派の人が満足感を感じやすいという弱い正の相関がみられ，偏回帰係数が有意となった可能性があるだろう。今後，調査やその他の研究手法（インタビューなど）も用いながら，各身体部位に対する満足感と可変性の関連，満足感が自尊感情や対人行動に及ぼす影響について検討を重ねる必要がある。

引用文献

江田節子（2006）．大学生のボディーイメージと食習慣について　関東学院大学人間環境学会紀要 第６号，41-50.

Harter, S.（1998）. The development of self-representation. In W. Damon, & N. Eisenberg（Eds.）, *Handbook of child psychology. Social, emotional,and personality development*. New York: Wiley. 3, pp.553–617.

堀江加誉子（2005）．ダイエット行動とセルフ・エスティーム，ボディ・エスティームの関連について　臨床教育心理学研究，31，101.

石原久代・大澤香奈子（2003）．若い女性の将来の身体像と被服観に関する一考察　名古屋女子大学紀要 家政・自然編 第49号，11-20.

金本めぐみ・横沢民男・金本益男（1999）．身体に対する相互認知に関する研究　上智大学体育紀要 32号，1-10.

Leary, M. R.（1986）. Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and reseach. In Jones, W. H., Cheek, J. M., & Briggs, S. R.（Eds.）*Shyness: Perspectives on reseach and treatment*. New York: Plenum Press. pp27-38.

枡田 庸・牛田聡子・永野光郎（1992）．自意識が身体像の評価に及ぼす影響（第１報）繊維製品消費科学，33, 566-575.

村澤博人（2000）．おしゃれ白書―アンケートにみる顔の美醜観―　ポーラ文化研究所

大村美菜子・小島弥生・中田洋二郎・沢宮容子（投稿中）．肌の美しさは七難かくすか　―青年期女子における身体満足感が自尊感情およびシャイネスに及ぼす影響―

大村美菜子・小島弥生・中田洋二郎・沢宮容子（印刷中）．大学生における身体の可変性についての基礎的研究　―KJ法による可変性に関する自由記述の分析を通して―　立正大学心理学研究年報　第５号

Phillips, K. A., Menarda, W. & Fay, C.（2006）. Gender similarities and differences in 200 individuals with body dysmorphic disorder. *Comprehensive Psychiatry,* 47, 77-87.

柴田利男（1990）．青年期の身体満足度が対人不安および自己開示行動に及ぼす影響 心理学研究, 61, 123-126.

鈴木幹子・伊藤裕子（2001）．女子青年における女性性受容と摂食障害傾向：自尊感情，身体満足度，異性意識を媒介として 青年心理学研究, 13, 31-46.

注釈

１）シャイネスとは「他者から評価される，あるいは評価されることを予想することによって生じる対人不安と対人行動の抑制により特徴づけられる感情―行動症候群（Leary，1986）」と定義される個人特性である。

２）身体カセクシススケールは50項目から構成されている。本研究では，調査の際に質問紙の分量に制約があったため，すべての項目を使用することができなかった。そこで，著者たちが協議の上，項目内容が重複している身体部位は削除する形で，26項目を抽出して使用することとした。

３）身体カセクシススケールには，顔の身体部位に関する項目が比較的少なかったため，これらを加えた。